

日本フランス語フランス文学会

2019 年度春季大会

2019 年 5 月 25 日 (土)・5 月 26 日 (日)

会 場：成城大学 3 号館・7 号館
〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

第1日 5月25日 (土)

受 付 11:30~17:25 3号館 エントランス

開会式 12:45~13:00 003教室 (3号館地階)

司会 高 名 康 文 (成城大学)

開会の辞 北 山 研 二 (成城大学)

開催校代表挨拶 戸 部 順 一 (成城大学長)

会長挨拶 石 井 洋二郎 (中部大学)

研究発表会 3号館・7号館 各教室

第1部 13:15~14:45 第2部 15:00~16:00

特別講演 16:15~17:25 003教室

Sophie Basch (Université Paris-Sorbonne)

« Le salon d'Odette, des japonaiseries aux salons blancs :
à la recherche du décor perdu »

司会 有 田 英 也 (成城大学)

懇親会 17:45~20:00

会場：7号館地階 学生ラウンジ

会費：正会員A：5,000円

正会員Bならびに学生会員：3,000円

研究会 5月25日 (土) 10:00~12:00

ラプレー・モンテニュ・フォーラム 712教室 (以下、7号館1階)

日本スタンダード研究会 713教室

18世紀フランス研究会 714教室

日本ヴァレリー研究会 715教室

日本カミュ研究会 716教室

フローベール研究会 721教室 (以下、7号館2階)

パスカル研究会 722教室

日本ブルースト研究会 723教室

日本ジョルジュ・サンド研究会 724教室

日本クローデル研究会 725教室

日本マラルメ研究会 726教室

日本フランス語学会 731教室 (7号館3階)

第2日 5月26日 (日)

受 付 9:30~15:00 3号館 エントランス

ワークショップ 3号館 各教室

第1部 10:00~12:00 第2部 13:00~15:00

総 会 15:15~17:15 003教室

議長 鈴 木 雅 雄 (早稲田大学)

閉会式 17:15~17:25 003教室

会長挨拶 石 井 洋二郎

閉会の辞 末 永 朱 胤 (成城大学)

大会本部：成城大学文芸学部有田英也研究室

お問い合わせ先：Tel: 03-3482-9613

e-mail: taikai2019seijo@gmail.com

大会当日連絡先：上記メールアドレスまで

一般控室・賛助会員展示会場：312 教室 (3 号館 1 階)

学会誌編集委員控室：711 教室 (7 号館 1 階)

研究発表会司会者控室：32A 教室 (3 号館 2 階)

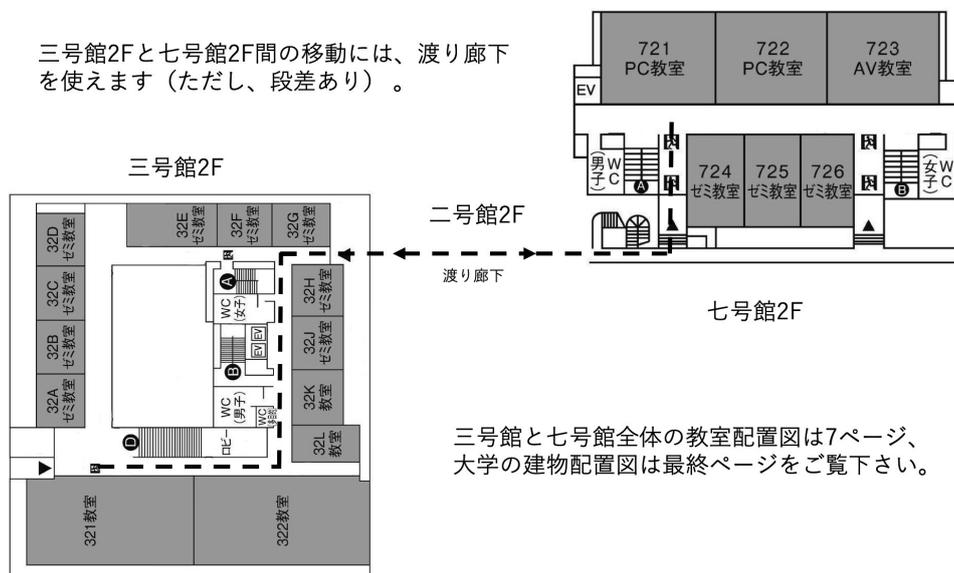
- 大会費：1,000 円 (受付で名札を配布します。開会式後は会場への入場券を兼ねますので、着用をお願いします。)
- 懇親会費：別紙「大会費等の振込について」を参照。いずれも同封の払込取扱票にて、**5月10日(金)**までにお振込みください。
- 大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局 (sjllf@jade.dti.ne.jp) までご請求ください。
- 委員会・役員会については、各委員長・幹事長よりご連絡いたします。
- 昼食については、5月25日(土)、26日(日)両日も会場周辺の飲食店、スーパー、コンビニが営業をしておりますので、お弁当の用意はいたしません。
- 会場で託児サービスを希望する方は、下記の案内をご参照の上、**5月17日(金)**までにお申し込みください。

研究発表会プログラム 5月25日(土)

	第1部 (13:15~14:45)	第2部 (15:00~16:00)
A会場 3号館 1階 311 教室	語学	16世紀・17世紀
	司会：杉山 利恵子 (明治大学) 1. フランス語における若者ことば <i>parlers jeunes</i> の社会言語学的研究 — グルノーブル都市圏での調査をもとに 比内 晃介 (筑波大学大学院博士前期課程) 2. 意見動詞の補足節における直説法と接続法の叙法選択 — 否定文のケース 井上 大輔 (上智大学大学院博士後期課程)	司会：久保田 剛史 (青山学院大学) 1. モンテーニュによる「魂の享受」としての友情 竹中 公二 (慶應義塾大学非常勤講師) 司会：秋山 伸子 (青山学院大学) 2. コルネイユ『オトン』におけるディスクールと劇展開の関係性 — ラシーヌ『バジヤゼ』との比較の観点から 鈴木 彩絵 (上智大学文学部特別研究員-PD)
B会場 3号館 2階 321 教室	19世紀 ①	19世紀 ②
	司会：小野 潮 (中央大学) 1. シャトーブリアンと北方文学 — 『殉教者たち』(1809)の「フランク族の軍歌」をめぐって 高橋 久美 (早稲田大学非常勤講師) 2. 『パルムの僧院』における名誉の掟 — 小説(ロマン)における「地方色」をめぐって 上杉 誠 (日本学術振興会特別研究員)	司会：熊谷 謙介 (神奈川大学) 1. 文学研究の中の芸術キャバレー「シャ・ノワール」 — 文学における集団性と新聞発行 岡本 夢子 (リエージュ大学大学院博士後期課程) 司会：高井 奈緒 (日本女子大学) 2. アルフォンス・ドーデ作品における語りと挿絵 — 『サフォ』(フラマリオン、1912年)を例として 須田 彩香 (東京大学大学院博士後期課程単位取得退学)
C会場 3号館 2階 322 教室	20・21世紀 ①	20・21世紀 ③
	司会：塩塚 秀一郎 (東京大学) 1. 運命の皮肉、歴史の怪物 — ミラン・クンデラ『ジャックとその主人』をめぐって 須藤 輝彦 (東京大学大学院博士後期課程) 2. ル・クレジオ初期作品における色彩 — 「物質的恍惚」の時代 大谷 健一郎 (パリ・ソルボンヌ大学博士課程)	司会：野崎 徹 (放送大学) 1. 愛国のシンボルとしてのサラ・ベルナール — プロパガンダ映画『フランスの母親たち』にいたる過程からの考察 白田 由樹 (大阪市立大学准教授) 2. <i>Les Parapluies de Cherbourg et L'Arlésienne</i> — À propos de Madeleine et de Vivette 山本 武男 (慶應義塾大学専任講師)
	司会：笠間 直穂子 (國學院大学) 3. 〈少女〉として語られること — マリー・ンディアイ『シェフ — ある女料理人の物語』をめぐって 今野 安里紗 (筑波大学大学院博士課程)	

	第1部 (13:15~14:45)	第2部 (15:00~16:00)
	20・21世紀 ②	20・21世紀 ④
D会場 7号館 2階 721 教室	司会：根岸 徹郎 (専修大学) 1. 『花のノートルダム』における花嫁のイメージ — 異性愛的表象の書き換えをめぐって 中田 麻理 (立教大学大学院博士課程)	司会：和田 恵里 (青山学院大学) 1. スワンは敗者か？ — 『失われた時を求めて』における『スワンの恋』の位置付けについて 小林 ゆり子 (東京大学大学院博士後期課程) 2. 「スワンの恋」におけるヴァントゥイユの《ソナタ》像 関野 さとみ (一橋大学大学院博士後期課程)
	司会：福田 耕介 (上智大学) 2. ポール・クローデルの「プロパガンダ」講演旅行 — 第一次世界大戦における愛国主義とカトリシズムをめぐって 上杉 未央 (日本学術振興会特別研究員 RPD) 3. クローデルの日本観と大正天皇崩御 — 「ミカドの葬儀」を中心に 学谷 亮 (創価大学助教)	
	思想 ①	思想 ②
E会場 7号館 2階 722 教室	司会：有田 英也 (成城大学) 1. アベラールとエロイズの享楽 — ジルソンの解釈とラカンの精神分析に依拠して 桑原 旅人 (東京大学大学院博士課程)	司会：阿部 崇 (青山学院大学) 1. ミシェル・セールにおける「第三項排除 tiers exclu」と「混合体 corps mêlés」 — 弁証法に対する二つの批判的変形 縣 由衣子 (慶應義塾大学助教) 2. ミシェル・フーコーとマラルメ 柴田 秀樹 (滋賀短期大学非常勤講師)
	司会：大森 晋輔 (東京藝術大学) 2. 悪魔的操作 — ピエール・クロソウスキーの伝達の問題における媒介について 後庵野 一樹 (筑波大学大学院博士後期課程)	

三号館2Fと七号館2F間の移動には、渡り廊下を使えます (ただし、段差あり)。



三号館と七号館全体の教室配置図は7ページ、大学の建物配置図は最終ページをご覧ください。

特別講演 5月25日(土) 16:15~17:25

003 教室 (3号館地階)

Le salon d'Odette, des japonaiseries aux salons blancs : à la recherche du décor perdu

Sophie Basch (Université Paris-Sorbonne)

« Pour peu qu'elle sût “durer” encore quelque temps ainsi, les jeunes gens, essayant de comprendre ses toilettes, diraient : “Madame Swann, n'est-ce pas, c'est toute une époque ?” » Bien qu'à la dernière mode, les toilettes d'Odette font signe à un passé qu'elle incarne à jamais, comme un sémaphore pour la génération en herbe. À la lumière de cette observation du Narrateur, au début de *À l'ombre des Jeunes filles en fleurs*, le décor du petit hôtel de la rue La Pérouse évoque les « period rooms », ces reconstitutions muséales que Proust abhorrait. La reconstitution de la capsule temporelle d'Odette en est d'autant plus ironique. S'il est établi que la villa « Les Talus », meublée par Mallarmé pour Méry Laurent, a partiellement inspiré l'intérieur d'Odette, le passage des murs « peints de couleurs sombres » aux « appartements Louis XVI tout blancs » n'a guère été commenté. Cette transfiguration qui accompagne la mutation des sentiments suit bien sûr l'évolution des arts décoratifs. Mais il se peut aussi, tant la coïncidence est troublante, qu'elle ait été inspirée à Proust par un roman oublié et que la parodie renforce l'ironie.

託児サービスのご案内

開設日時	2019年5月25日(土) 9:30~18:30 2019年5月26日(日) 9:30~18:30
場所	成城大学構内
委託先	株式会社アルファコーポレーション http://www.alpha-co.com 
ご利用資格	日本フランス語フランス文学会 2019年度春季大会に出席する学会員を保護者とする 生後3か月~小学校6年生までのお子さま
料金	お子さま1人あたり1日1,000円
申込方法	4月26日(金)より、日本フランス語フランス文学会のホームページ (http://www.sjllf.org/) に利用規約や保険についての説明など、ご案内を掲載します。(「学会からのお知らせ」をご覧ください。) 予約のページへのリンクがありますので、そちらからお申し込みください。 
申込締切	<u>5月17日(金)</u> 注意：収容人数の関係で、1日あたり5名程度のお子様の申込をいただきましたら締め切らせていただきますので、早目にお申し込みください。

ワークショップ 第1部 5月26日(日) 10:00~12:00

ワークショップ1 003 教室 (3号館地階)

カミュの『誤解』ができるまで/できてから

コーディネーター: 岩切 正一郎 (国際基督教大学)

パネリスト: 稲葉 賀恵 (演出家)、乗峯 雅寛 (舞台美術)、原 まさみ (舞台衣裳)

演劇芸術監督に新しく小川絵梨子氏を迎えて始まった新国立劇場の2018/2019年シーズン、その最初の演目は、アルベール・カミュの『誤解』新訳上演であった(翻訳は岩切が担当した)。演出は文学座の気鋭の若手、稲葉賀恵氏が担当し、リアリズムを排した斬新な舞台装置と演出で好評を博した。本ワークショップでは、その稲葉氏と、美術の乗峯雅寛氏、衣裳の原まさみ氏をお迎えし、カミュの、一見かなり理屈っぽいセリフ劇にもみえる戯曲を、今の日本でなぜ上演しようと思ったのか、そのいきさつから始めて、その舞台化の舞台裏——キャスティングはどのようにして決めたのか、美術はどのようにして構想され実現されたのか、衣裳はどのような考えとプロセスを経て決定されていったのか、等——のお話を伺いたいと思う。そしてまた、じっさいに幕があいたあとの舞台(裏)で行われること、やってみて始めて分かることがもしあれば、そうした発見についても、語っていただこうと思う。

英語圏の作品数には及ばないながらも、ジュネ、ラガルス、レザ、ゼレールといった、現代の古典から比較的新しい作品まで、この一年だけでもフランス演劇の上演は日本で頻繁に行われている。フランス演劇に取り組むときに、他言語の作品の翻訳上演とは違いがあるのだろうか。フランス語の戯曲は現場の人々にはどのようなものとして認識され、アプローチされているのだろうか、そうしたことについても、フロアを交えて議論してみたい。それを通じて、本ワークショップが、フランス語・文学を専門としている我々のいわば内側の理論的・思想的な眼差しと、外からの、現場の、創造的な眼差しとが交わる、その交点となるシーンのうえにたちあがるヴィジョン、日本におけるフランス演劇の魅力や特殊性や可能性についての考察を共有できる場となることができればと思う。

ワークショップ2 311 教室 (3号館1階)

文学と人生

コーディネーター・パネリスト: 立花 史 (大学非常勤講師)

パネリスト: 高田 敦史 (会社員・美学研究者)、森本 淳生 (京都大学人文科学研究所准教授)

文学は、人生にどのような省察をもたらすのだろうか。

こうした一見素朴な疑問は、専門的な文学研究が必ずしも対象としてきたものではないが、作家や読者が幾度も投げかけてきた問いであると同時に、おそらくは文学関連の講義にかかわる講師や学生にとって、今なお吟味に値する問いであると思われる。

本ワークショップは、このような問題意識から文学を論じ直すことを目的とするが、その際、試みに、今日「文学の哲学」と称される分野を参照する。「文学の哲学」は、美学および芸術哲学の下位部門として位置づけることができ、フィクションの哲学と密接にかかわるものである一方、現在フランスでも浸透しつつあり、英米哲学と大陸哲学の垣根を越えて、文学とそれにまつわる諸概念の特性をめぐる現代のテクニカルな論争から、時代や地域ごとの哲学的な文学観の歴史までを含む、今なお未規定な研究領域と言える。

高田は、分析美学の見地から、フィクションのうち、とりわけ「物語」を扱う。文学にかぎらず、映画やコミックを視野に入れ、物語作品を通じて(とりわけ人生や死や生き方の問題をめぐって)哲学することが可能かどうかに関する現代の哲学的な議論を紹介する。

立花は、フランス文学研究に対する「文学の哲学」の影響の度合いを測りつつ、マラルメ研究の見地から、「韻文」に焦点を当てる。昨年のマラルメ・シンポジウムの成果に依拠して、詩人の作品を通じ、物語や虚構世界には還元不可能な仕方では着想された韻文をめぐる思考をたどった後、彼がそこから描き出す人生観を紹介する。

森本は、近代の〈生表象〉の知見を援用しつつ、高田と立花の発表に対してコメントと質問をおこなう。

ワークショップ3 321 教室 (3号館2階)

人間/動物/仮面 — 中世文学と19世紀バルザック作品における動物表象

コーディネーター: 東 辰之介 (駒澤大学)

パネリスト: 高名 康文 (成城大学)、伊藤 由利子 (成城大学非常勤講師)、沖久 真鈴 (成城大学非常勤講師)

イソップ、ラ・フォンテーヌを持ち出すまでもなく、ヨーロッパでは古くから動物寓話が多数存在する。本ワークショップは、anthropomorphisme (擬人化) と zoomorphisme (動物変身)、masque (仮面) という、文学における動物表象を分析する際に広く応用しうると考えられる分析概念を用いて、中世の物語と19世紀バルザック作品における動物表象を考察していく試みである。

まず、高名は、人間社会を諷刺する物語において、なぜ動物が登場するのか、そこでは動物たちが人間の仮面を被っているのか (anthropomorphisme)、あるいは、人間たちが動物の仮面を被っているのか (zoomorphisme) という視点から『狐物語』を論じたジャン・バタニーの論考を理論モデルとして提示した上で、仮面を被っているのが人間か動物かが曖昧になってしまう例を、『狐物語』と『フォヴェール物語』からとり、その文学的な効果について分析を行う。

そして、伊藤・沖久は、バルザックの作品から動物表現を分析するが、伊藤はバルザックの初期作品である『毬打つ猫の店』から店の看板の解説と、看板が挿入された背景を提示し、看板が作品のみならず『人間喜劇』全体において重要な機能として作用している可能性を探る。また、作品内において私生活における猫の表象の分析を行うが、沖久も同様に猫が私生活に登場する『ゴリオ爺さん』を中心に、その後の作品における動物表象について分析を行う。その際、19世紀における博物学や動物園の誕生といった時代背景にも触れ、バルザックが動物比喩を用いて人間を描こうとした意図を考察する。

ワークショップ 第2部 5月26日(日) 13:00~15:00

ワークショップ4 311 教室 (3号館1階)

19世紀における詩とリアリズム

コーディネーター・パネリスト：塚島 真実 (大谷大学)
パネリスト：吉村 和明 (上智大学)、足立 和彦 (名城大学)

19世紀においてリアリズム小説が興隆したのとほぼ同時期、詩は「韻文＝詩」という等式が大きく揺るがされる激動の時を迎えていた。こうした動きはあたかも小説ジャンルの変容とは完全に分離した流れであるかのように文学史では語られてきたが、小説における新たな潮流に詩人たちが決して無関心ではなかった。本ワークショップでは、19世紀後半の詩における「リアリズム」の可能性を考えてみたい。

吉村は、ボードレールの詩的リアリズムについて考察する。ボードレールは文学的・芸術的運動としてかたちをなしたリアリズムこそ容認しなかったものの、彼の詩学の根底にはまちがいになく(現実的なもの)との深い関わりがある。その意味でボードレールにかんして一種の「詩的リアリズム」といったものを想定することができる。「腐肉」という詩をとりあげて、そのことについて考える手がかりとしたい。

塚島は、バンヴィルの初期のテキストに注目する。クールベに対する評価や雑誌『リアリズム』との関わりに焦点を当てつつ、ボードレールに「抒情的」な詩人と称えられたバンヴィルが、「抒情性 *lyrisme*」と対立するようにも見える「リアリズム」の概念を詩というジャンルにおいてどう捉えていたか考えてみたい。

足立は、自然主義と詩の関係について考察する。1870年代にエミール・ゾラは詩にも「自然主義」が導入されるべきだと主張し、その先駆的実践者としてフランソワ・コペや青年詩人モーパッサンの名を挙げていた。ゾラ自身の青春時代の習作も視野に含めつつ、自然主義という文学理念と詩というジャンルとの関係を考察し、この時代に開かれていた(?)「詩におけるリアリズム」の可能性を問い直してみたい。

ワークショップ5 321 教室 (3号館2階)

わたしのなかのアルジェリア — 多声と多形の作品創造

コーディネーター・パネリスト：石川 清子 (静岡文化芸術大学)
パネリスト：青柳 悦子 (筑波大学)、鶴戸 聡 (鹿児島大学)

20世紀後半、(フランス文学)に対して補完的に配置された(フランス語圏文学)は、その枠組が曖昧なまま変容する世界の文学情勢のなかで論じられてきた。そのなかで(フランス語アルジェリア文学)は、他のマグレブ諸国の文学とは異なる位相を呈しつつ旺盛に書き継がれている。現在、誰がいかなる書法で、どこで書いているのか。アルジェリア的なものを発信する作家はアルジェリア人に限定されない。その書き手はフランスの移民二世(プール)と以降の世代、引揚者(ピエ・ノワール)、亡命者など、アルジェリアとフランスを主にしつつも世界各地に及び、その作品も従来の文学の枠を越境している。本ワークショップを、水声社から刊行開始されたマグレブ文学翻訳叢書(エル・アトラス)紹介の場にもしたい。

青柳は、生後すぐにアルジェを離れたバンド・デシネ作家、ジャック・フェランデズを紹介。仏統治下アルジェリアの絵巻でもある『オリエント手帖』とカミュ翻案『客』『異邦人』『最初の間』を参照しつつ、今まで照射されなかったピエ・ノワールをめぐる問題、カミュのアルジェリア性を捉え直す。

しばしば(プール)の作家に数えられるレイラ・セバルも、自身の欠落したアルジェリアをフランスから追求する。石川は、その第一小説『ファティマ、辻公園のアルジェリア女たち』を軸に、雑多に見える膨大な数のセバル作品が形成する一貫性を読みとる。

鶴戸は、アルジェリア人作家、カメル・ダーウドの『もうひとつの「異邦人」 ムルソー再捜査』を取りあげ、世界的古典を反転させて語り直した話題作を紹介しつつ、アルジェリア文学の新たな動向と、複数言語の併用から醸成されるこの文学の独自性を強調する。

ワークショップ6 322 教室 (3号館2階)

庭をめぐる変奏 — さまざまなメンタリティーの交錯する場とは

コーディネーター・パネリスト：北山 研二 (成城大学)
パネリスト：荒木 善太 (青山学院大学)、倉方 健作 (九州大学)

フランスの庭園は、18世紀までは王侯貴族らが固有の世界観を具体化する場として歓迎され、19世紀後半では多くがパブリック・ガーデンとして受容され、20世紀後半では、パブリック・アートにして、多様なメンタリティーの交錯の場になった。このワークショップでは、時代を異にする3つの「庭」を選び、時代のメンタリティーを先駆的に反映する場としての庭園の読解を試みる。

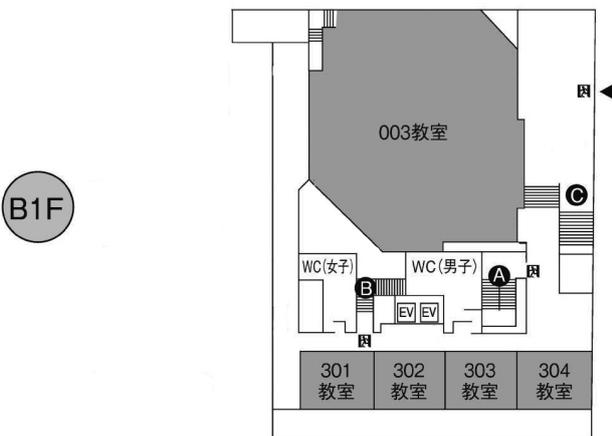
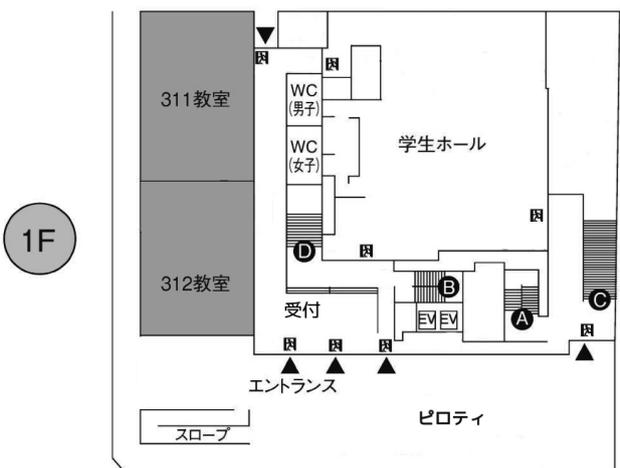
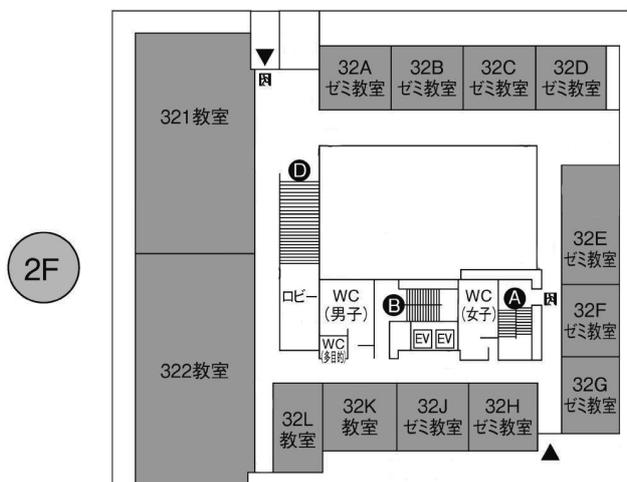
荒木は、17世紀後半のル・ノートルとともに登場した「風景」あるいは「視覚の装置」としての庭の姿に注目する。とりわけヴォー・ル・ヴィコントの造園において具現された「見え隠れする庭」の手法を通して、仮象と現実、「そうみえるもの」*paraître*と「そうであるもの」*être*の両義性の観点から、庭園と「バロック」の関係を考察する。

倉方は、19世紀後半から20世紀初頭におけるリュクサンブール公園に着目する。ボードレール、エレディア、ヴェルレーヌらを顕彰する像が置かれた公園は、実際には、彼らの文学作品における存在感は希薄である。パリの詩人たちの活動圏内にありながら、一種の空白地のような趣さえある。公園と詩人が取り結ぶ関係を、作品の引用とともに考察する。

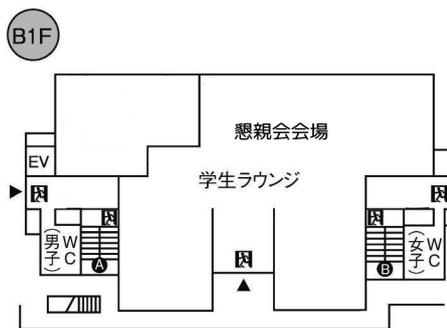
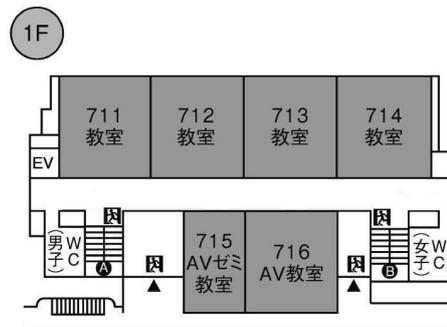
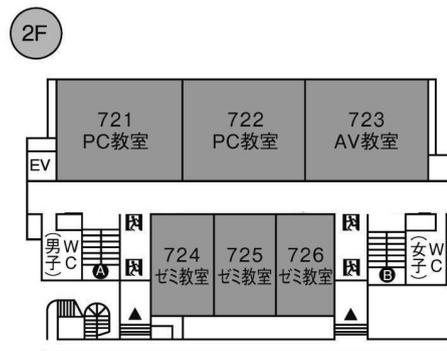
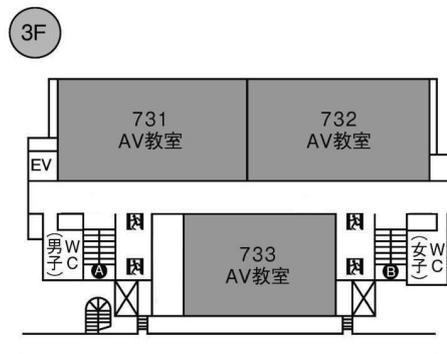
北山は「巨大機械は庭園になるか」を主題にする。ティンダリーは、ルーセルの『アフリカの印象』の「絵を描く機械」の実作後、役に立たない機械スクラップ・アートを世界中に設置した。最後の《キュクロプス》(1969-1997、高さ22m・重さ100トン)は、20人の現代アーティストの協力でパリ南東の森林内に造営された。これは、自然中心のメンタリティーと共存するという機械の「機械庭園存在論」になりうるか。そもそも庭園とは何かを問う。

大会会場（成城大学3号館・7号館）教室配置図

3号館

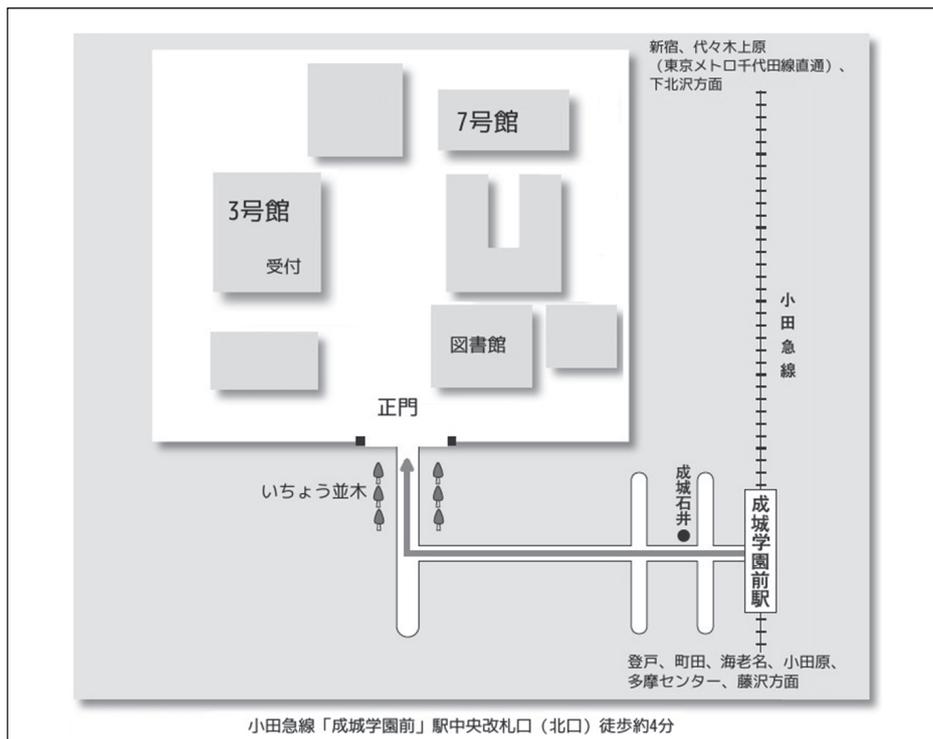


7号館



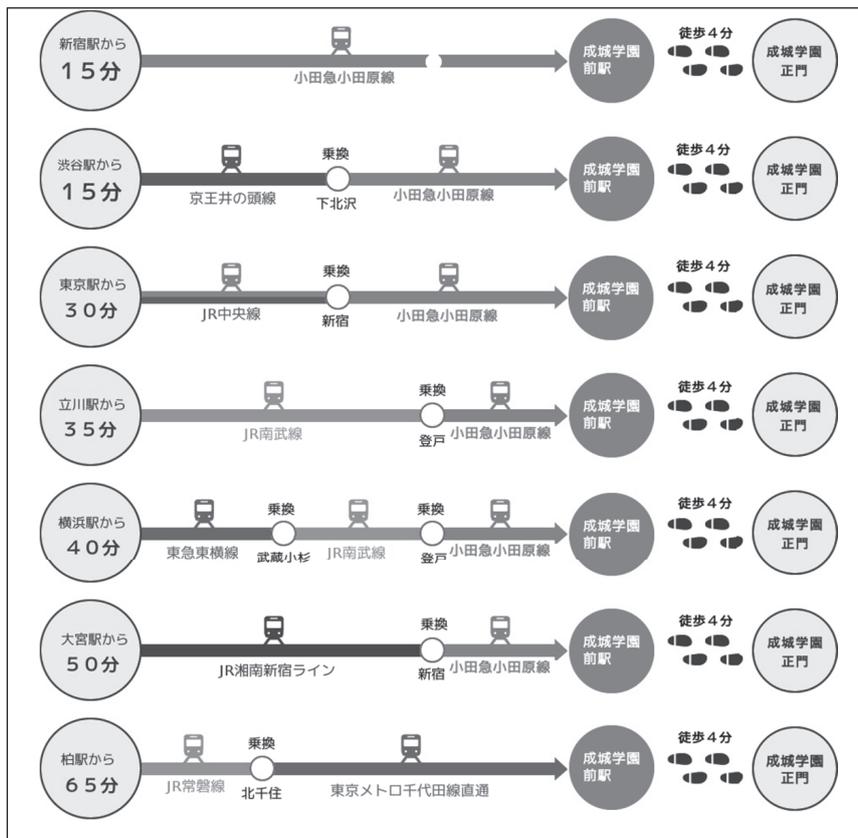
会場へのアクセス

※小田急線成城学園前駅北口から徒歩で約4分



首都圏主要駅から小田急成城学園前駅までの経路とおよその所用時間

※小田急線成城学園前に「急行」は停車しますが、「快速急行」は通過となりますので注意でご乗車ください。



会場に駐車場はありません。公共交通機関でお越し下さい。



成城大学ホームページ
学園への乗換案内

<http://www.seijo.ac.jp/access/>

日本フランス語フランス文学会 2019 年度春季大会実行委員会は、以下の方々のご協力に感謝いたします。

成城大学グローバル研究所員の鈴木重周さん、大澤舞さん

(学生アルバイトの募集と、当日の運営のためにご協力いただきました。)